

## ムール＝ペリオ共編

マルコ・ポーロ「世界事情」第一、二巻

A. C. Moule &amp; Paul Pelliot,

Marco Polo. The Description of the  
World. Vol. I. & II.

London: Routledge &amp; Sons, 1938.

これはマルコ・ポーロの「世界事情」すなはち「東方見聞録」に關する諸研究の大感ともいふべき劃期的な大著である。

およそこの見聞録の研究には三つの方面がある。第一にはテキストの問題、第二には書物に書かれた記事の歴史的・地理的解釋第三にはマルコ・ポーロ自身の事蹟がそれである。そして十年前まではイギリスのサー・ヘンリー・ユール Sir Henry Yule が解説・英譯・註解し、それにフランスのアンリ・コルデイエ Henri Cordier が増補した *Travels of Marco Polo* 三巻がすべてに於いて最高の權威であつた。

一九二八年にイタリヤ、フィレンツェ大學のフランス文學教授ベネデット L. F. Benedetto 氏の大作 *Il Milione* が現はれるに及んで、第一のテキストの問題についての説は一斬されるにいたつた。ベ氏は今日歐洲各地にのこつてゐる從來未知の「マルコ・ポーロ」の寫本六十部を發見し、すべて一三八部の寫本について綿密な檢討を行ひ、これらの系統をあらかにした。その主張の概要は

寫本は F. 地理協會本系と、R. ラムージオ系とに大別され、更に細かに分類される。そして從來原本の正しい寫しと信ぜられてゐたパリの國民圖書館所藏の寫本 *Ms. 1116* はゆる「地理協會本」は、實はかなりの省略削棄の手が加へられたものである。ユールは原本は簡略なものであつたが、傳寫の間にいろ／＼な追記や附加へ行はれたとするが、實際は反對に原本は詳しく長いものであつたが、傳寫の間にだんだん削られたものである。「地理協會本」やその他の諸本に見えぬ記事を多く含む R. ラムージオ刊本（一五五九年初版）は、從來問題とされてはゐながらも、重要視されてはゐなかつたが、これは原本にほど近い一寫本を材料として校訂を行つたものであつて、さういふ獨特の記事を、その寫本より寫したものであるから、重視せねばならぬ。

といふのであつて、結局右の「地理協會本」を現存の寫本中の最善本とすることは舊説と同じであるが、その本に於いては原本のわたちが大層をこなはれてゐると説く所に大切な相違がある。かくて彼の大著はこの F 本を校定印行し、それにこの本に見えない記事や、これと異つた字句を諸本より採つてそれぞれの寫本の言葉のまゝ、欄外に註記し、本文と校勘記とを併せ讀むことによつて、失はれた原本の面目を復原しようとして企てたものであつた。

こんどのムール＝ペリオ版は四巻より成り、その第一巻が序論、英譯された本文、其の他の附録より成つてゐる。その本文はもちろん右の F 本を骨子としたものであるが、異本に見える文章字句

も一つに綴り合はせて英文に譯されてゐる。そしてF本の文章はふつうの形(ロマン)の活字で印刷され、異本よりとつた字句はイタリック體で書かれて區別され、その典據となつた寫本の記號が欄外に示されてある。翻譯者ムール氏はこの爲に十七の主要な寫本の寫眞を手許において、F本に見えぬ字句は細大洩らさず探録したといふ。さきによべ氏はF本をはじめ校勘記もすべて原寫本の言語をそのままに寫すといふ方針をとつたのに對して、これはすべてが現代英語に統一され、前には欄外に記された字句も本文の内にとり入れられてあるといふ、綜合的、折衷的な點が最もいちじるしい特色と見られる。このF本といふのはイタリア語風の綴字・語尾變化がひどく混つた中世フランス文で書かれてゐて、大變讀みづらいものであり、校勘記もラテン語以外にイタリア諸方言その他の中世諸國語がそのままに記されてゐる厄介至極なものであつたのだが、この版の出現によつて、これからの研究者は一通りのことだけはこの本で済ませられるから大變らくになつたわけである。

この本文の前にあるムール氏の序文には、マルコの事蹟、家系などと、最も重要なF、R(ラムージオ刊本)、Z(後にいふゼラダ本)の三種の解説とが記されてゐる。

本文の後には三項の「附註」について、附録として、主要な刊本七種についての「章節對照表」、「現存寫本一覽表」はそれぞれ研究者に有用なものである。後者にはべ氏の調査以後に發見された寫本が五部録されており、その中の一つは後段に説くZ本である。

最後はマルコ・ポーロの一族、屋敷、墓に關する古記録類約六十通の寫しであるが、これについても一言せねばならない。はじめに述べたマルコ・ポーロ研究の三方面のうち第三の方面も最近にめざましい進歩をとげたのである。それはヴェネチア市記録保存所のオルランディーニ教授 G. Orlandini が同所保管の古文書のうちから、マルコの遺言狀・遺産目錄をはじめマルコ及びポーロ一家に關係した諸記録を探し出して「マルコ・ポーロとその家系」Marco Polo e la sua Famigliaなる研究を公けにした。この附録はオ氏のすでに發表したものに未發表のもの二十五通を合せた寫しであり、またさきのムール氏の序論の前半部はオ氏の研究に負ふ所の多いものである。

第二卷はゼラダ寫本(Z本の複印である。第一卷の刊行にさき立つて昨年春に出版されたものであるが、一九三五年にすでに印刷だけは出来てゐたことである。このZ本といふのはべ氏の寫本の系統の研究の最も大切な手がつたものである。べ氏がミラノのアンプロゾ文庫で發見したラテン文の一寫本に、ゼラダ樞機官所藏の古寫本から寫したとの序記があつて、これはFよりも更に原本に近い佛伊混淆文體の本によつて譯したものであつたが、完全な本ではなく、初めの方は甚だしい節略である。これにF本にない記事が二百句ばかりもあり、その三分の二は問題のラムージオ本獨特の記事と一致するといふわけで、べ氏の主張の最も有力な根據となつたものである。その後一九三二年にサー・パーシヴァル・デヴィッドがミラノ本の原本なるゼラダ本がスベ

インのトアルドにあるのを發見したが、ペ氏の見たミラノ本には誤寫もあることが判つて、かやうに版に附せられたのである。

既刊の第一、二巻の大體は右に述べた通りであつて、ムール氏が編纂の任に當つてゐる。

續刊の第三巻はペリオ氏が主編であつて、數篇の論文とペリオ氏の手になる記事の註釋、研究書目などが收められ、第四巻は圖版及び地圖とのことである。近年の佛・英・蘭の諸雜誌に現れる「見聞録」の註解に類するもの、乃至は蒙古時代の中央アジア、支那の歴史地理、各地の習俗に關する論文のム・ペ兩教授の筆になるものが目だつて多く、ユール・コルディエの註解の改められたものゝすくなくないことは人の知る所である。また、ユール本(G本)に見えない記事で、註解を必要とするものも甚だ多い。冒頭に述べた研究の三方面のうち第二の方面は、この第三巻によつて果してどれほど進められるか、大きな期待をもつ次第である。

この本の題名を、私はこの文の初めに見える様に、こゝろみに「世界事情」と譯してみた。原本に最も近いとされるF本の標題は *Le disamenent du monde* となつて居り、こゝろのムール・ペリオ版もそれに従つてゐる。イタリア語の通稱は *Il Milione* といふ。英語では *The Book of M. P.* であるは *Travels of M. P.* と呼び、いまで出された三種の邦譯本は、いづれも英語版からの翻譯であつたため「マルコ・ポーロ旅行記」と題されてゐた。國定教科書では「東方見聞録」といふ呼び方をしてゐる。本の内容は決してたゞの旅行記ではなく、原題の示すがごとく、その頃のア

ジアの事情について何も知らなかつた歐洲人のために、東方各地の事情をいろ／＼述べたもので、いはゞ初めて書かれた科學的な地理書ともいふべきものである。だから後者の方がいくらか實際にちかひ。

なほ本年三月の東洋史研究四ノ三拙稿「マルコ・ポーロ旅行記の近刊諸校註本について、補遺二則」に述べた所は本文と多少の出入があるから、同好の士の就いて見られんことを希望する。

(デイマイ・クワルト版、第一卷五九五頁、第二卷一三二頁、四五〇部限定版、價格、四册六磅六志、邦貨約百貳拾圓)(藤枝是)

### ドプシユ著 社會經濟史論叢

#### Alfons Dopsch: Beiträge zur Sozial- und Wirtschaftsgeschichte.

昨年、ドプシユの七十歳誕生記念を迎へてその論文集が門弟達の手によつて出版せられ此の碩學の新業績が再び吾々の書架に光彩を加へることゝなつた。著者ドプシユとその業績については今更事新しく述べるまでもないが、その主義は別として論文集としても、既に一九二八年その六十歳誕生記念として出版された *Verfassungs- und Wirtschaftsgeschichte des Mittelalters* がある。本書はその續篇に當るもので、最近の十年間に書かれた論文十一篇を中心とし、他に先の二八年の論文集に洩れた「連續性の問題」、著者の「自序傳」、門弟の執筆にかゝる「自序傳補遺」が加へられてゐる。誕生記念に當り弟子達の獻作集でなくドプシユ